

「脳死・終末期医療そして臓器移植」について、看護学生に講義をした際に頂いた学生の感想文から情報をご提供致します。一般市民から看護職としての医療専門職にまさに今巣立とうとしている若者の意見です。今後、いくつかの感想文を「移植医療に携わる方からのメッセージ」と「リレーメッセージ」の欄に掲載する予定です。

今後、私たちが臨床現場に出ていくに当たり、脳死の状態となった患者さんやその家族と出会う場面があるかもしれない。その時に、その家族が状況を受け入れ、脳死の意味を納得できるためには、看護者自身も正しい知識を理解していること、そして、その家族の悲しみや戸惑い、不安などの想いを自分自身も同じように感じ理解しようとする共感的態度で寄り添うことが大切だと感じた。私は将来そのような看護師になりたいと思った。

今回の授業をきっかけに“脳死は人の死であるのか”と考えたとき、医学的立場の考え、看護者としての考え、自分自身の思い、家族だったら、という考えが重なり合ってしまう、結局答えを絞ることができなかった。しかし、今回、グループで討議して、今はまだ臨床で働いたことがない私にとっては、どうしても医療者の考えよりも、自分・家族的視点で考えてしまった。もし、家族が脳死となり、あと2週間で亡くなるとしても、人工呼吸器で生かされているとしても、本人の意思でなかったとしても、私は生きて欲しいと思う。今日聞いた意見の中で、「意識があった頃のその人の笑顔(表情)・その人の声(会話)・感情はなく、その人らしさも無く、ただの人間である。そうならば、本人にとっては“自分の死”ではないのか。」、という言葉が心に残っていて、確かにその通りだと思った。結局は、脳死判定で延命治療を選択するのか、命の終わりを選択するのかは家族次第のところが大きく、本人の意思が不明なことが多い。しかし、私が残された家族だったら脳以外の他の臓器はまだ生きており、体温もある、その温もりも私はその人の一部であると思うし、その人に触れた温かさで自分も安心する。もし意識が戻らなくとも最期までその温もりに寄り添っていたいと思うのではないかと思った。

他のグループが発言していたように、脳死～全身の死まではほぼ患者の周りの者たちのためにあるような気がした。人間ひとり一人考え方も価値観も違うし、経験も違うため、脳死と死の基準を結論付けることは本当に困難だと思う。しかし、一番大切なことは、本人の思い・意思を尊重し最期までその人らしい死を迎えることだと思う。そのため、生前から家族と死への思いや意思を確認しておくことも大切な関わりだと感じた。私は、臓器提供意思表示カードを持っているが、家族は臓器提供に反対であることから気持ちを伝えたことがない。しかし、今日の授業をきっかけに意思・考えを確認し合うことも大切だと学んだので一度話してみようと思う。

私は、終末期医療に最も興味があり、緩和ケア病棟に就職予定である。そのため“ヒトの死”に関わる場面が多くなると思う。自分の死の迎え方や終末期の過ごし方を人は簡単に決断することは難しく、精神的にも不安定になると思う。その時、看護師として患者や家族の本音や言葉にできない想いを会話に中から感じたり、傾聴し受け止め、共感的態度で関わり、日々の療養生活の中で揺れ動く患者の気持ちにいち早く気付いて声をかけたり、そっと寄り添える看護師でありたいと感じた。

終末期を迎え入れることは容易なことではないが、苦しみの中で患者が受容できたとき、どんな終末期や最期を迎えたいのか希望を確認し、可能な限り書面に残しておくことは本人の意思を尊重するためにも大切なことだと学んだ。そのうえで、意思変更はいつでも可能であることを伝え、患者の感情や意思の変化を敏感に察しながら、患者の価値観を尊重し、患者にとって何が最も良い選択であるか見極め、患者の選択を支援することが大切だと学んだ。

患者との信頼関係を築きアドボケーターとして医療者・家族に患者の想いを伝えていきたいと感じた。